

クラウドファンディング

映画づくりにCF ファン参加型も

第一線の監督作 オーディション出場や審査

インターネットでアイデアを提案し、一般の支援者から資金を集める「クラウドファンディング(CF)」は、映画界では制作費の支援だけでなく、ファンと一緒に作品づくりなどに挑まれる場へと変化している。その現状を追った。

1月中旬、「SUPER SAPIENSS」(スーパーサイエンス)と題したプロジェクトの発表会が東京都内であった。「TRICK」の堤幸彦(66)、「踊る大捜査線」の本広克行(66)、「ストロボリナーイト」の佐藤祐市(59)のテレビドラマ出身の映画監督がタッグを組んで、原作づくりから電子コミック、映像化まで挑むという企画だ。「人類」という大きなテーマを設定し、3人がこれまで撮ってきた作品の共通項であるサスペンス色を出しながらも、学園ドラマなどをそれぞれが制作するという。

「自分たちは本当につくりたいものがつくれているのか」。きっかけは昨年、映画祭のオンラインイベント

トで3人が共通して発した言葉だった。第一線の彼らが世に放ったヒット作は、多くの企業から資金を集める「製作委員会方式」で、題材から予算、撮影日数など様々な制約を受けてきた。

そんななかでコロナ禍に直面し、映像制作がストップする事態にも陥った。「やりたいことがやれなくて、予算にはめれば偉いのだろうか」(佐藤さん)と自らの足をそれぞれが見つめ直したという。「これまででは公開して終わり。一方通行だった」(堤さん)と順みて、映画ファンと向き合い、その声を制作過程に反映させるために活用したのがCFだった。

今年16日までに参加したサポーターは一口5千円



「SUPER SAPIENSS」の発表会に登壇した佐藤祐市監督(左端)、堤幸彦監督(左から2人目)、本広克行監督(右端)

(5千円)から支援し、その際に「トークン」と呼ばれるデジタル上のアイテムを得る。保有数に応じて、俳優オーディションに参加したり、審査員に加わったりできる。シナリオ設定やプロモーション方法について監督たちが催す「支援者

ミニシアター運営 議論の場

映画界では、「この世界の片隅に」「カメラを止めるな!」など、CFを活用した話題作が生まれてきた。最近では、映像制作の支援以外にも広がる。東京・下北沢に1月にオープンしたミニシアター「K2」もその一例だ。開館を目指して募った金額は300万円だったが、予想を上回る750万円超の支援が集まった。

映画の多様性を担保するミニシアターだが、先駆けとなった岩波ホールが閉館を決めるなど、経営が難しい現実がある。K2を共同運営する大高健志さん(38)は、息長く続けるために、支援者のコミュニケーションづくりに力を入れる。上映作



CFを使ってオープンしたミニシアター「K2」

「CFの一般的な考え方方は『寄付』だと思うが、私たちはファンと対等な関係で一緒にモノをつくる前提での『投票行動』だと思って運営している」。東京都市大学の中村雅子教授(情報社会学)は「CFはファンの期待やニーズを直接把握することができ、ファンがCFを通じて映画制作に携わることで、制作側は作品について意図を解説し、より深く理解・納得してもらえ、より『ミニコミュニケーション』も生まれやすいだろう」と指摘。「運営面に必ずしもたけておらず、リスクが大きい企画も出てくるかもしれないが、多くのクリエイターがチャレンジする機会を増やすという意味では大きなチャンスだ」と話す。(細見卓司)

- この記事・写真等は朝日新聞社の許諾を得て転載しています。(承諾番号 22-0902)
- 無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。